

日本の学童ほいく

全国学童保育連絡協議会

普及拡大 ニュース

みんなで読もう！ 目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

2022年5月26日

元気が出る
みんなの
取り組みを
ご紹介

楽しく普及拡大

地域持ち回りで「私のおすすめ『日本の学童ほいく』」の報告は元気がでるね。

連絡協議会の活動方針に「ほいく誌」の普及推進を掲げる。

神奈川県学童保育連絡協議会では、活動方針に以下の4点を掲げて普及推進を進めています。

- ① 購読目標部数 (3,000部/月)
- ② モニター登録、投稿の呼びかけ
- ③ 普及推進会議を開催し、地域連協と共に普及推進に取り組む
- ④ (全国連協の求めに応じ) 編集委員を送り出しています。

特に③の普及推進会議は毎年1月に開催し、購読することの意義や、連絡協議会や研修での活用方法などについて交流する機会となっています。「普及推進会議で紹介された工夫(特に紹介したい箇所にしおりなどを挟んで渡している)に取り組んでいる」などの報告もあり、会議を続けることの大切さを感じています。

また、毎月の県連協運営委員会で参加地域持ち回りで「私のおすすめ『日本の学童ほいく』」の時間を設け、気になった記事、地域やクラブで共有した特集などをご紹介いただくとともに、2か月に1度発行している県連協ニュース「神奈川県の学童保育」でもその内容を紹介しています。ニュースは県連協のホームページに掲載していますので、ぜひ読んでみてください。

議員との懇談にも学童保育を身近に感じられるよう「ほいく誌」を活用

もちろん、研修や研究集会では講師や世話人と「ほいく誌」の活用を確認して取り組んでいます。加えて、行政との懇談、議員との懇談でも、訴えたい内容や地域の状況を伝えるために「ほいく誌」が大切なアイテムとして活躍しています。地域選出の衆議院議員との懇談でも、つい最近訪問していただいたばかりの学童保育の指導員が執筆した「私は指導員」が掲載された号とグラビアで紹介された号をお渡ししてきました。地域の記事を紹介することで、学童保育が身近に感じてもらえると思っています。

神奈川県

の
取り組み



日本の学童ほいく 5月号

特集 子育ての仲間と共に —— 学童保育の保護者会・父母会

特集では、各地の保護者会・父母会で培ってきた経験や工夫、コロナ禍における現状を交流し、保護者会・父母会を通じて保護者同士、保護者と指導員が関係を築くことの大切さをあらためてたしかめあいます。



日本の学童ほい・く

みんなで読もう目標 3万6000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

普及拡大 ニュース

2022年5月26日

読者の声

長崎県長与町●保護者から

2021年11月19日、最大食分が0.978という「ほぼ皆既月食」が見られるという日。それまで天体にはまったく興味がなかった私ですが、娘は学校の理科の先生から「月食があるよ」と教わって楽しみにしている様子。聞けば、18時2分頃に部分食の最大を迎えるという。「これはこまった、いつも19時ぎりぎりに学童保育にお迎えに行く私が、18時2分に間にあうのか……。しかし、楽しみにしている娘の気持ちに伝えたい……」。その日はなんとか仕事をやりくりして、17時50分に学童保育に到着しました。そんな私の苦労をくんでくれたかのように、学童保育の駐車場横の広場から見えるように、くっきりと姿を見せてくれたお月様。寒空の下、娘とぴったりくっついて夜空を見あげ、何度も「すごいねー」と言いながら月食観察をしました。最近では、私が知らないことも、子どもから新しく教わるようになりました。そんなときにははしみじみと子どもの成長を実感します。今後も、いろいろな行事や出来事を家族と一緒に楽しむ日々を大切にしていきたいです。
 (『日本の学童ほい・く』2022年4月号「読者のひろば」より)

山形県山形市●保護者から

コロナ禍の影響により、さまざまな場面で制限が増え、子どもも親も気分が滅入ってしまうことも多々。わが家では長年、単身赴任している夫が毎週末に家族のもとに帰ってくる生活をおくっていました。しかしこの間、夫が山形でテレワークをすることが増え、家族5人そろって過ごす日が格段に増えました。小学4年生の三男は、これまで学童保育へのお迎えがいつも19時ぎりぎり遅く、家でのんびりしたい気持ちも強まっていたので、不機嫌になることがあってこまっていました。いまでは、父親が夕方の早い時刻にお迎えに行ってくれる日が増え、息子もごきげんです。私にとっても、夫の協力が心身共に支えになっています。そして学童保育の行事も、保護者が担当する各部会で工夫し、実施されるようになってきています。雰囲気だけでもいっそう盛りあげようと、おたよりに通じて、各家庭で不要になった装飾品の提供が呼びかけられました。「ハロウィン」では、切り絵図を印字した紙が各家庭に配布され、製作の依頼がありました。ほかにも、飾りを折り紙や雑誌でつくって持ち寄りました。そして行事前夜、保護者有志がサプライズで飾りつけをしました。息子は前日まであまり乗り気ではありませんでしたが、飾りつけの効果もあって、おばけ屋敷のようになったムード満点の部屋で友達と大いに楽しみ、迎えに行くと「帰りたくない」と言うほどでした。これからも、コロナ禍でできなくなったことを憂うより、さまざまな場面で、別のやり方を工夫して、新たな展開を子どもと一緒に楽しみたいと思います。
 (『日本の学童ほい・く』2022年4月号「読者のひろば」より)

「新型コロナウイルス感染症」の影響で、この2年半、指導員仲間や保護者と顔を合わせてつながりあうことを制限せざるをえなくなりました。保護者会や保護者参加行事が中止となり、地域を越えての指導員仲間との会議もできなくなりました。私が所属している三多摩指導員の会は、2か月に1回程度、日曜日を基本に活動をしています。「緊急事態宣言」の中、集まりを持つことができなくなったときに、なんとかつながりを持ち続けたいと、オンラインでの会議を始めました。その中で、「オンラインだったら平日の夜も時間が作れるかも」と毎月1回、夜の8時30分からほい・く誌の読書会をはじめました。夜遅い時間ですが、自宅からの参加なのでゆったりとしながら、飲み物やお菓子を片手にほい・く誌を広げています。一人ひとりが順番に読み合わせる時間というだけでなく、その間のおしゃべりも楽しく、くつろぎながら癒されるひとときもなっています。いろいろなことができなくなったと嘆くことが多いコロナ禍の生活ですが、コロナ禍でなければ生まれなかった指導員の会のオンライン読書会。一人で読むことはもちろん、仲間とともに『日本の学童ほい・く』を読む時間も私の支えとなっています。

私と「ほい・く」誌

全国連協役員リレー執筆・
 今月は三多摩の小野さとみさん